

White-Jacket 試論 (II)

——ヒーローになりそこねた男の告白——

水 木 慶 子

— 1 —

はじめにお断りしておくが、本論文は拙稿「White-Jacket 試論 (I) ——世界における個人の運命——」(東京工芸大学工学部紀要 Vol.7, No.1 1984 に掲載)の続稿として書かれたものである。Melville の処女作 *Typee* から第四作 *Redburn* までの作品は、すべて何らかの意味でのユートピア探索であるということ (いずれの場合にも探索は失敗に終る)、だが、第五作 *White-Jacket* では最初から軍艦世界が巨大な逆ユートピア (ユートピアの対照的イメージ) として捉えられており、しかもそれがそのまま広く人間世界一般の比喩ともなっていること、自然もまた概して暗く野蛮なものであること、そしてその中であって多くの人間は互いに傷つけ合うばかりであり、Chase, Ushant など強大な自我のイメージを持つ人物も何人かは存在するものの、世界 (人間界と自然界を含めた意味での) に対抗できうるほど強大で、しかもその自我の力を傾けるべき大いなる目標をもった、ピラミッドの如き人物は未だ創造されていないということについては前回に述べた。本稿においては、もう一人の重要な登場人物、White-Jacket 自身を取りあげながら、この作品における個人と世界の関係という問題について、引き続き考えてみたい。

White-Jacket とは如何なる人物であり、軍艦での生活を体験してどのような変貌をとげてゆくのだろうか。彼に奇妙な呼び名を与えることとなった白いジャケットは彼自身の製作品であった。本来なら司厨庫手から支給してもらえるはずの厚手ウールの「ピージャケット」——つまり、軍艦世界の制服であり囚人服である——がたまたま切

れており、彼は自分の手でオリジナルなもの (“an outlandish garment of my own devising”¹⁾) を作る羽目になったのである。白い帆布の内側に「古靴下や古ズボンの足などいろいろ寄せ集めの布きれ」をぬいつけると、一見「鎖帷子」(p.4) のように丈夫なジャケットが出来あがった。さらに彼は「貴重品」を貯えるため、ジャケットの内側に多くのポケットをぬいつけたのである。

There were, also, several unseen recesses behind the arras; insomuch, that my jacket, like *an old castle*, was full of winding stairs, and mysterious closets, crypts, and cabinets; and like a confidential writing-desk, abounded in snug little out-of-the-way lairs and hiding-places, for the storage of valuables.

(p.36)

こうして出来あがった「古い城」のようなジャケットとは、若いそれがそれなりの歴史をもつ White-Jacket の自我の象徴だと思われる。「古靴下や古ズボンの足などいろいろ寄せ集めの布きれ」(家庭や学校で彼が今まで受けてきた教育) で作られた自我の城の壁は厚く、その壁に守られている「貴重品」とはすなわち彼の青年らしい夢や理想などを表わす。そして多くの夢や理想でふくらんだこの城には「内なる広さ」²⁾ も感じられる。なぜなら、「裾のあたりにはクエーカー教徒の長衣のようなふくよかさがあがり」、「裾のポケットには、内側から大きな沢山入の入口がついており」、また「袖口はぎごちないほどたっぷりしている」³⁾ からである。

さて、このジャケットの最大の特長は、その色

が白いことであった。普通のピージャケットは「黒っぽい色」(p.120)であるのに、これは“A very tasty, and beautiful white linen garment” (大変上品で美しい白いリネンの衣：p.4)であったからである。この衣を羽織った White-Jacket が軍艦「不沈」号の高いマストの帆を弛めている姿は、下からはまるで“albatross” (信天翁^{あほうどり}) のように見える。⁴⁾ ところで、信天翁とは「天の果つる辺境」——天と地上の境——を飛ぶ鳥であり、⁵⁾ また“linen”には“purity” (穢れのなさ・無垢) の連想がある。⁶⁾ ゆえに、White-Jacket の衣の白さは、彼が地上にありながらもなお、天上の資質——基本的な無垢——をもち続けていることを象徴しているのではないかと考えられるのである。⁷⁾ しかし、軍艦世界の住人の多くは、彼らが黒っぽいジャケットを着ていることから明らかなように、無垢はもちろん夢や理想なども持ちあわせているはずはなく、自分と異なる者や自分が失った物を持つ者を本能的に嫌悪するのは人間の常であるので、White-Jacket もその衣ゆえに多くの船員仲間から疎まれる結果となるのである。例えば、白いジャケットが彼の「気取り」・「尊大さ」のしるしと取られ、彼は所属の食事班から追い出されてしまうのだ：“Somehow, there had never been a very cordial feeling between this mess and me; all along they had nourished a prejudice against my white jacket. They must have harbored the silly fancy that in it I gave *airs*, and wore it in order to look consequential; perhaps, as a cloak to cover *pilferings* of tit-bits from the mess.” (p.61).

以上のように、出航時の White-Jacket の自我は、夢や理想が沢山つまった、無垢で広々として壁の厚い堅固な城として表わされている。これは傷ついた蛮人の多い軍艦世界ではかなり特異な存在である。そしてまた、「サン・ピエトロ大聖堂の巨大なドーム」や「巨鯨」には到底及ばぬにもせよ、この城にはやはり幾分かの人間ピラミッドのイメージが感じられるのである。⁸⁾ まだ若く無邪気で経験にも乏しかったため、White-Jacket はこの城で充分に生きていけると信じ、ジャケット

に対する満足を次のように述べている。

For some time after completing my Jacket, and getting the furniture and household stores in it; I thought that nothing could exceed it,... (p.37)

Truly, I thought myself much happier in that white jacket of mine, than our old Commodore in his dignified epaulets. (p.22)

しかし、この満足も長くは続かなかった。厚く堅固だったはずの城の壁は実は「スポンジと同様、防水ではなく」、早くも出航直後から雨嵐の“a universal absorber” (吸水器：p.4) となったからである。これは Mad Jack の広い胸が「強風をせきとめる隔壁」(p.33) であるのとは違って、White-Jacket の自我の壁 (彼が今までに受けてきた教育で作られている) が荒々しい自然を前にしては抵抗力を持たなかったことを示している。彼はそのような自然により一方的な攻撃を受け七面鳥のように食べられてしまう存在なのである：“I dripped *like a turkey a’roasting* :” (p.4).

やがて、たび重なる雨の影響で、ジャケットの中の貴重品 (夢・理想) はすっかり縮んでしまった。⁹⁾ そこへさらに今度は、同様に野蛮な人間界 (軍艦世界) の攻撃が加わる。船上のスリによって「貴重品」が次々に盗まれてしまうのである：“To a man, they were pickpockets, and bent upon *pillaging* me.” (p.37). ここでもまた、White-Jacket は略奪の対象となるのである。

このように、White-Jacket の自我は自らを守りうる壁を持たず、野蛮な自然と人 (世界) の攻撃により侵略され、「貴重品」 (夢・理想) を次々に失ってゆくのだが、この過程は、この時期、彼に実際にふりかかる事件によって裏付けが与えられている。例えば、出航後まもなく、所属する食事班の班長となった White-Jacket は、素晴らしい「ダフ」を作って仲間の「信用」と「人気」を得ようとするが失敗し (p.61), 前述のようにさんざんジャケットの悪口を言われたあげく、班から追い出されてしまう (対人関係での幻滅。) ま

た、彼は自然が見せるつかの間の美しい相に幻惑されて我を忘れ、自分が“a part of the All”（宇宙という全体の一部：p.76）であるかのような錯覚に陥った結果、あやうく檣頭から落下しそうになり、このような錯覚に陥ることの危険性を思い知らされる（自然に対する幻滅。）さらに、彼は艦上で迎えた独立記念日に今までの厳しい規律がゆるめられるのを見て、「一度規律をゆるめたからには、以後は士官たちも前ほど厳しくは出来なくなるだろう。軍する船（人）も結局は平和と善意の船（人）なのではないか」¹⁰⁾ という甘い期待を抱くが、早くも次の朝にはもう見事にこの期待を裏切られてしまう（軍艦世界に対する幻滅）といった具合である。

こうして不運なジャケットは、Cape Horn を通る頃までには「全体がひどく縮んでしまっていた」（自我の城の縮小。）かつての「内なる広さ」——裾のあたりのふくよかさ、袖口のたっぷりした感じ——も、もはや見られない。¹¹⁾ しかし、世界の攻撃は執拗である。Cape Horn では、人間を“dis-mast”しようとする（人間のマストをへし折ろうとする）自然のこれまで以上に厳しい攻撃にあう。ここでも再び、White-Jacket は自然のえじきとなる存在として描かれている：“...the jacket was stuffed out about the breasts like a Christmas turkey,” (p.100). そしてまた、Cape 付近での暗い夜など、彼は士官から“many a hard job” (p.120) を仰せつかる羽目となる。暗やみの中で目立たない他のジャケットとは違って、白いジャケットが彼を“individualize”する（個性化する、目立たせる：p.121）からである。White-Jacket は依然として自然と人の攻撃対象であり続けるのだ。

ところが、たび重なる攻撃を受けているうちに、White-Jacket は二つの正反対の反応を示すようになる。その第一は、ジャケット（自我）を守りたい——自己を主張したい——というものである。例えば食事班での事件が起きた際、彼は「人気を軽べつし、冷笑には冷笑を返し」(p.61)、ついに追い出される時にはジャケットを「半ば挑戦的に」¹²⁾ 体の回りにまきつけるような仕草をする（“I immediately rose, tucked my jacket about

me, bowed, and departed.”: p.62). また、同様の反応は Rio での“gig-man” (p.161) 事件にも見られる。“gig-man”とは艦長の筏の漕ぎ手のことで、普通にはなかなか名誉な役目だと考えられている。ある日、White-Jacket は“gig-man”の一人に選ばれるが、その制服となった白いフロック（フロックは海軍で規定されたスタイルのものでなくてはならない）¹³⁾ の持ちあわせがなく、朋輩のものを借りねばならなかった。そして一度この役をつとめた後、“gig-man”とは実際には「艦長の従者の一種」(p.163)にすぎないことを知った彼は、自分自身でありたいと願い、早々に代役を見つけてこの役目から降りてしまうのである（借り着を返して、白いジャケット——自分自身——に戻る。）

第二の反応は、全く逆に、この特異なジャケット（個性ある自我）から逃れたいというものである。White-Jacket は、ジャケットを仲間と同じ黒っぽい色にしようとデッキでこすったり、仲間のもので交換しようとして失敗したり、海中に捨てようかと考えたりする (p.121)。これは自己を変えたい、自己を放棄したいという願望の表われに他ならない。彼は、以上二つの異なった反応の間に揺れ動くが、「不沈」号が Rio に停泊中、ついに一人は自己放棄の衝動に駆られ、艦内での競売にジャケットを出してしまうのである。

このようにして競売に出されたジャケットは見るも無残なありさまであった。もはや、かつての広々として壁の厚い堅固な城の面影はなく、既に「時ならぬ老齡」がしのびよっており、「かすかにカビが生え」、中身（夢・理想）を失ったポケットの口をぬいあわせたための傷もついており、鯨網のように夜風を通す。若き理想家の敗北の姿である。そして、デッキ（実際の戦闘が行なわれる「行動の場」：p.32）でこすられたため、全体が“an exceedingly untidy appearance”（はなはだ不潔な様相：p.201）を呈していた。このように、白いジャケットがうす汚れてきている状態は、今や、White-Jacket の無垢が変質しつつあるということを暗示しているのではないかと思われる。そしてそれは、全く思いがけず殺人を犯すことになってしまった Billy Budd の汚れた白い衣を連想

させるのである。¹⁴⁾

さて、競売に集まった船員らは値をつけてくれるどころか、ジャケットを口ぎたなくののしり、ついには「海に捨ててしまえ」とまで言い出す始末であった。こうしてさんざん痛めつけられたジャケットは「ネソスの死のシャツ」のイメージを帯び始める：“my jacket stuck to me like the fatal shirt on Nessus.” (私のジャケットは、ネソスが身につけていた死のシャツの如くに、私にへばりつくこととなった：p.203.) ネソスとはヘラクレスに殺された半人半馬のことで、死ぬ間際に自分の血に浸した布をヘラクレスの妻に贈ったという。ところが、後日、彼女がその布をぬいこんだ白い上着をヘラクレスに着せると、それが彼にまつわりついて苦悶の死をもたらしたとされている。¹⁵⁾ つまり、ネソスは自分も殺されたが相手も死に至らしめたわけであり、「ネソスの死のシャツ」とはそれが贈られた相手にも苦悶の死をもたらし物なのであって、ここに至って、今まで一方的な被害者にすぎなかった White-Jacket の中に、加害者そしてついには世の中に対し反逆者となる可能性が生れつつあることが暗示されているのである。夢がついえた時に、無垢の理想家ほど、反逆者に転じやすい者もまたないのである。White-Jacket はいわば青春の危機にさしかかっているのだ。

さて、この潜在的可能性は、White-Jacket が無実の罪であやうく鞭刑に処せられそうになるシーンにおいて、一たんは実現しかけるのである。彼がこのような窮境におちいったのは、中尉 Bridewell のミス（「上手回し」の際の持場を彼に教えておかなかった）からなのだが、また幾分かは彼自身の自己主張にもよる。というのは、メインマストに呼び出され艦長の審問を受けた時、彼は「各文章ごとに阿諛追従の風を示して帽子に手をやる」(p.279) という通例の恭順の動作¹⁶⁾ を行なわず、それが艦長の反感を買う原因となったからである。

ところで、鞭刑とは人間を肉体的または精神的に“dismast”しようという試みであった。¹⁷⁾ 鞭を受ける罪人はジャケットはもちろんシャツも脱が

され、背中をさらさなくてはならない。White-Jacket の場合にはジャケットが自我の象徴なのであるから、そのジャケットを脱がされ鞭打たれるということはまさしく自我の「マストをへし折られる」ことに他ならないのである。今、絶体絶命の窮地に立たされ霞がかかった White-Jacket の目の前に、鞭を手にしたボースンの属が、次作 *Moby-Dick* の冒頭に現われる白鯨の姿¹⁸⁾ にも似て“loomed like a giant” (巨人のようにぼうっと立ちだかっていた：p.280.) 彼の心に“wild thoughts”がよぎったのはこの時であった。ちょうど Ahab が巨大な白鯨におち当たり白鯨につながれたまま死んでいったように、White-Jacket もまた、この野蛮な軍艦世界の支配者であり、今、自分を“dismast”しようと襲いかかってくる力の根源である艦長に体当たりし、彼もろとも海に沈んでいこうという衝動に取りつかれたのであった。これは極限状態におかれた人間が自分の命と引きかえに行う最後の自己主張であって、それはすなわち軍艦世界の法と支配者に対する反逆に他ならない。¹⁹⁾ つまり、今まで White-Jacket の中に潜在していた加害者・反逆者となる可能性の実現であり、まさに己の死に際して、相手に「ネソスの死のシャツ」を投げかける行為なのである。

ところが、White-Jacket が行動をおこそうとしたその瞬間、天の助けが入った。大変稀な「ほとんど前例をみない」ことであったが、二人の人間が——最初は Colbrook 伍長が続いて Chase が——彼のために弁明を行なったのである。この「介入の異常さ」(p.281)に圧倒されたかのように、艦長は White-Jacket を無傷のまま放免する。かくて、White-Jacket の反逆的衝動は結局は何ら具体的な行動に結びつかず、彼は「殺人者と自殺者になる」²⁰⁾ 運命——Taji, Ahab, Pierre など Melville の“Characteristic hero” (Melville の反逆者たち) の運命²¹⁾ ——を免れるのである。

だが、この事件以降もジャケットには依然として「ネソスの死のシャツ」に類するイメージがまといつき、White-Jacket は仲間から“Damn you, you Jonah!” (p.332) であるとか“Blast you, and your jacket,” (p.333) などとののしられたり、殺

人者または「悪党」²²⁾と見られたりもする。これは、彼の中に引き続き反逆的衝動が潜んでいることを示すものだが、また同時に彼には相変らず「被害者」という以前からのイメージも残っており(“damn”, “blast”される), 彼がこの両者の間に揺れ動いていることが感じられるのである。しかし、やがて例の髭そり事件が起こり, White-Jacket は“mutiny”(反乱: p.357)を起こすよりは, Chase を見習って髭をそってしまふ。つまり、彼は自己主張をしたり反逆者となるよりは軍艦世界の権力に従って自我への侵害を許す方を最終的には選んだのであり、この事件によって、彼がついにはジャケットを失ってしまうということが暗示されていると言える。

さて、問題のジャケットを失うシーンは、この作品の中で最も印象的なものの一つである。ある日、トゲルンのハリヤードの目通しをするため、メインマスト高く登っていった White-Jacket は、船の揺れのためジャケットの裾を頭からすっぽりかぶってしまい、手を放した瞬間にまっさかさまに転落してしまう。普通ならば当然死ぬところであったが、空気の渦を通して落下しているうちに彼の体は横向きとなり、さらに海に突入した衝撃により体が回転し足が下になったおかげで、いったんは海中へと沈み始めたものの、再び浮かびあがることのできたのであった(海が最終的に彼の方向を変え命を救ったともいえる。)ところが、船の方へ向かって泳ぎ出そうとしたとたん、水をはらんでふくらんだジャケットが邪魔になったのである。彼に多くの難儀をもたらしたことといい、今また落下の原因や泳ぐ邪魔になったことといい、ジャケットは彼がこの軍艦世界(人間世界一般の比喩でもある)で生きのびてゆくためには脱ぎ捨てねばならない物なのだ。彼は腰のナイフを引き抜くや、「あたかも自分自身を切り開くようにジャケットを縦一文字に切り裂いて」、脱皮するが如く「その中から踊り出た」のであった: “I whipped out my knife, that was tucked at my belt, and ripped my jacket straight up and down, as if *I were ripping open myself*. With a violent struggle I then *burst out of it*, and was

free.” (p.394)

これは、White-Jacket が今までの個性的な自我(無垢の理想家と、そしてその残骸の中から現れつつあった反逆者)を切り捨てることによってのみ、つまり自ら己自身を“dismast”することによってのみ、生き長らえたことを意味している。彼の目の前で重く水を吸ったジャケットはゆっくりと沈んでゆく。かつて White-Jacket は自分が軍艦世界において反逆者として処刑され海に葬られるのではないかという恐怖感に取りつかれたことがあり、²³⁾ また実際に鞭刑を受けそうになった時に艦長をひっかかえて海に沈もうと考えたこともあった。だが、今、反逆者として海に沈むという Melville の“characteristic hero”の運命はジャケットが代わりに一身に担って沈んでゆき、White-Jacket 自身はそれから解放されるのである。さらに、そのジャケットを艦上の船員らが白鯨と見間違え、銛の矢筈を打ちこむ。ちょうど「不沈」の船員の一人が海軍の悪弊を書きつづったという航海日誌がさし抑えられ、「大釘を刺し通され」「永遠に封印されて」「深海の底に投げ込まれた」ように、²⁴⁾ 軍艦世界にとって目ざわりな白いジャケットは攻撃を受けて消されるのである。

かくして、White-Jacket は青春の危機を乗り越え、航海に出る以前よりは世の中に対して醒めた目をもつ大人となり、そしておそらくはずっと平凡な人間ともなっていて故郷へ帰るのである。この物語は、荒々しい世界との遭遇において、自己の最も個性的な部分を切り捨てることによってのみ生きのびた人物、Melvillian hero になりそこねた人物の告白の記なのである。

— 2 —

さて、この小説は「不沈」号が実際にアメリカに到着する少し前の時点で終りとなっているのだが、物語の進行中に、この船が“homeward bound”(故郷へ戻る途中)であることに再三読者の注意が喚起されている。「故郷」とはもちろん具体的にはアメリカのことなのだが、この作品においては特別の意味あいを持っているように思われるのである。すなわち、「故郷」とは“far inland”(はるか

内陸の)，“that blessed clime” (かの恵みの国：p.396) であり，そこでは軍艦の武装もすべて解かれ，船員は皆この「牢獄」²⁵⁾ から解放される．そして，「軍艦での最後の不正の記憶も忘れ去られるであろう」 (“the last wrong in our frigate will be remembered no more”：p.396) というのだ．つまり「故郷」とは戦争や不正のない恵みの地，ユートピアのことなのである．

かつて「不沈」が「麗しの湾」，「喜びの湾」(p.210) である Rio に入港した時，White-Jacket はその美しさに恍惚となり，この港が自分たち船員にとって“a glorious haven” (すばらしき安息所：p.210) となることを期待したのであった．確かに，外海からは標高一千フィートの the Sugar-Loaf Mountain に，内からは大山脈 Organ Mountains によって守られており，The Hidden Water という別名をもつこの常夏の港には，一見，緑のユートピアのイメージが漂っている．湾から内陸へはぶどう園などを抱く緑したたる丘が続いており，馥郁たる香りに満ちている．Chase をはじめとする船員たちはその「オアシスの緑の草の上のところがり」「シトロンの匂いをかぐ」²⁶⁾ ことを希うのである．

ところが現実には，Rio に入港したものの，船員たちにはなかなか上陸許可が与えられず，軍艦に閉じこめられたままの日が続いた．そしてやっと「一日の自由」を得て上陸してはみたが，多くの者は酔っ払い，ケンカに巻き込まれケガをして帰ってくる始末で，Rio の恩恵に浴するどころではなかったのである．またそもそも，Rio には多くの人工の“long lines of batteries” (砲台の長い列) や“frowning fortress” (しかめ面をした砦：p.211) が作られていて，その美しさは既に穢されてしまっているのだから，この地に“a glorious haven” を求めるのは所詮無理な話なのである．

それゆえ，「故郷」には Rio で見た夢の実現という期待がかけられているのだ．ところが，Melville は語り手の White-Jacket (以下，登場人物である青年 White-Jacket を単に White-Jacket と，この物語を語っている現在の彼を語り手と呼ぶことにする) に「不沈」が実際に「故郷」アメリカに

到着したところまで語らせずに，“still with the land out of sight” (まだ陸地は見えず)，“our anchor still hangs from our bows,” (錨はまだ船首からぶら下ったままの状態：p.396) で，White-Jacket が仲間と手を取りあいつつ“our Pisgah top” (ピスガの嶺のような大檣楼：p.397) に立ちまだ見えぬ陸の方へ目を向けているところで，物語を終りにさせているのである．“Pisgah top”とはモーゼが死の直前に約束の地カナンを望見したという山で，“Pisgah sight”とは望んでいながらついに得られないものの遠くからの望見をいう．²⁷⁾ つまり，ここでは「故郷」がいわば“Pisgah sight”にとどめられているのであって，White-Jacket らがこがれているアメリカ——民主主義を掲げ“the ark of the liberties of the world” (世界の自由を積んだ方舟) を持ち“Political Messiah” (政治的メシア：p.151) を自任するアメリカさえも実は満足すべき「故郷」にはなり得ず，真の「故郷」(ユートピア) は永遠に得難いものであることが暗示されていると言える．

事実，帰国して既に久しいと思われる語り手は第 19 章において，突如異様なほどの激しい感情に駆られ，アメリカでの生活に対する不満をもらし，海での反逆者としての死——彼が捨て去った白いジャケットの運命——にこがれるのである．

Oh, give me again the rover's life—the joy, the thrill, the whirl! Let me feel thee again, old sea! let me leap into thy saddle once more. *I am sick of these terra firma toils and cares; sick of the dust and reek of towns.* Let me hear the clatter of hailstones on icebergs, and *not the dull tramp of these plodders, plodding their dull way from their cradles to their graves.* Let me snuff thee up, sea-breeze! and whinny in thy spray. Forbid it, sea-gods! intercede for me with Neptune, O sweet Amphitrite, that no dull clod may fall on my coffin! *Be mine the tomb that swallowed up Pharaoh and all his hosts; let me lie down with Drake, where he sleeps in the sea.* (p.77)

つまりは、ほこりと悪臭が漂い、人々のとぼとぼと歩く足音しか聞こえぬこのアメリカもまた、彼を閉じこめるもう一つの牢獄にすぎなかったのだ。いや、そもそも彼はここから逃げ出たくて海に走ったのではなかったのか。軍艦世界がそのまま広く人間世界一般の比喻でもある以上、野蛮な牢獄（逆ユートピア）でない人間世界などありえないのだ。

なるほど、この作品の終章“The End”においては語り手は気を取り直し、地球を銀河を航する“a fast-sailing, never-sinking world-frigate”（永遠に沈むことのない世界快足艦：p.398）にたとえ、現在「我々人間は多くの悪弊に苦しんでいるけれども」（p.399）、「主なる提督が介入し給うはず」であり、この艦には“some blessed, placid haven”（どこかの祝福された静かなる安息所：p.399）が用意されているに違いないと主張し、“Life is a voyage that’s homeward-bound!”（人生とは故郷に戻る旅なのだ！：p.400）と結んでいる。しかし、ここで言われている「安息所」または「故郷」とは遙か未来の理想社会か天国のことで、アメリカよりはずっと遠い非現実的なものとなっているのであり、しかもこの希望すら「我々人間の旅路は宇宙をめぐる無限の巡航に終わるのだ」という恐れに張り付かれているのである。

And believe not the hypochondriac dwellers below hatches, who will tell you, with a sneer, that our world-frigate is bound to no final harbor whatever; that our voyage will prove an endless circumnavigation of space. Not so. (p.398)

確かに、語り手はここでこの恐れを否定している。しかし、わざわざそれを持ち出して否定せねばならないという事実こそが彼が強い危惧を抱いているということの証明ではないだろうか。前作 *Redburn* では、リバプールの宿屋の小部屋にぐるりと貼りめぐらされた壁紙に描かれた“an endless succession of vessels of all nations continu-

ally circumnavigating the apartment”（ひっきりなしに部屋を巡航している世界各国の船の無限の列）²⁸⁾が登場している。部屋の小さな窓から見はらせるものといえば“a smoky, untidy yard, bounded by a dingy brick-wall”であり、通りからは“a confused uproar of ballad-singers, bawling women, babies, and drunken sailors”が聞こえてくるばかりである。つまり、これらの船は「人間は世界中を航海して回っても、輝きを失った世界と父（神）のいない人々の混乱した叫び声以外のものを見ることはないのだ」という事態²⁹⁾の象徴となっているのだが、この円環に閉じこめられた船が *White-Jacket* においてはいわば宇宙的規模の中に置き直されていると言ってよい。いかに宇宙を経巡ろうとも、地球という快走艦には現世においても来世においても「最後の港」（ユートピア）はなく、未来永劫この艦は逆ユートピアの円環牢獄から抜け出られはしないのである。

—むすび—

Typee に始まり *White-Jacket* に至る Melville の初期五作はいずれも、アメリカに厭いた青年が無意識のうちに何らかの形でユートピアを求めて繰り返し海に出てゆくという形式をとっている。既に述べたように、いずれの場合にもユートピアはついに主人公の手に入らないものなのであるが、それにしても処女作 *Typee* においては、少なくともこの地上のある場所に恵み深い自然に守られて、ユートピアらしきものが具体的に存在していた。だが、次作 *Omoo* となると、自然に守られたユートピアは既に過去のものとし、第三作 *Mardi* の、地上における天国の具現（一種のユートピア）である乙女 Yillah は血も肉も備わっていない抽象的存在であり、*Redburn* の“great castle or fort” (p.35) は実在のものというよりは、むしろ主人公の心の中に存在するものといった方がよい。そして最後の *White-Jacket* に至っては、以前ならば当然ユートピアイメージで現れたはずの緑のオアシス Rio さえも、軍艦世界の醜い砲台に穢されてしまっており、ユートピアは Rio から再度アメリカへそしてさらに天国へと求められてゆ

く、要するに、ユートピアはだんだん具体性を失い、どんどん人間からは遠い存在となりつつある（非在化しつつある）のである。

一方、ユートピアイメージとまるで入れ代わるかのように、*Redburn* において始めて本格的に現れた逆ユートピアのイメージは、*White-Jacket* においては軍艦が舞台となったということもあって、圧倒的な存在感をもって定着してきており、しかもそれがはっきりと、広く人間世界一般のイメージであるとされている。こういった状況に呼応して、自然も以前のような恵み深さを失ってしまう（ただ、転落した *White-Jacket* の命を救った最後の海だけが例外であるのだが。）そしてこの作品の終章では、逆ユートピアの円環牢獄に捕えられた我々人類の船（地球）が、非在化したユートピアを求めつつ、未来永劫甲斐もなく宇宙を巡るという壮大なヴィジョンが展開されている。Melville の世界に対する幻滅の度合は、作を追うごとに確実に強まって来ていると言えそうである。

このように逆ユートピアと化した世界（人間界と自然界とを含めた意味での）の中にあって、多くの人間はただ互いに傷つけあうばかりであるが、それでも幾人かは、巨大な世界に対抗すべく自らも人間ピラミッドになろうと試みる。これは、もはや自分を守ってくれるようなユートピアが現実にはとても望めそうもないので、いわば自らの自我の中にユートピアを築きあげようという試みであるとも言える。*White-Jacket* においてはまだ世界に対抗しうるほどの真に偉大な人物は創造されてはいないが、それにしてもこの作品で始めて自我と世界との対決という問題がクローズアップされたのであり、次作の Ahab と白鯨の対決へと受け継がれてゆくのである。

さて、最後に、少々蛇足の感を免れないが、*White-Jacket* 執筆当時の Melville の心境について触れておきたい。第三作 *Mardi* は Melville が精魂こめて書きあげた大作であったが、酷評を受け、商業的にも大失敗であった。それゆえ、次の二作 *Redburn* と *White-Jacket* は（その作品としての価値は全く別問題であるが）Melville 自身の

言葉によれば「金のためにやった仕事」であり、真から書きたいと思って書いたものではなかったのである。自分が本当に書きたいのは「失敗するであろうと言われるような本です」³⁰⁾ と Melville は述べている。

ところで、*White-Jacket* には Melville の分身と思われる Lemsford という詩人が登場してくる。彼はいつも自分の書きためた原稿を入れた箱を、「パンドラの箱」であるかの如く嫌う船の下っ端どもにつけねらわれているのだ（“They hunted out his hiding-places like pointers,” : p.42.）詩人や詩は無理解な連中の攻撃対象に他ならないのである。隠し場所に困った彼は、ある時原稿を大砲の砲身にさしこんでおいた。ところがこの大砲から礼砲が発射され、原稿はこっぴみじんとなってしまったのである。Chase は「これこそ最高の出版方法だ」と Lemsford を慰める：

“That’s the way to publish, *White-Jacket*,” turning to me—“fire it right into ‘em ; every canto a twenty-four-pound shot ; hull the blockheads, whether they will or no. And mind you, Lemsford, when your shot does the most execution, you hear the least from the foe. A killed man cannot even lisp.”

(p.192)

ここでは、読者（大衆）は“blockheads”（阿呆あたま），“the foe”（敵），“a monster”（怪物：p.192）と、出版は作者と読者の間の戦争と捉えられており、当時の Melville の意識を示すものとして興味深い。

さらにまた、Howard P. Vincent の指摘によれば、この小説の冒頭に現れる白いジャケット製作の描写には、作家による小説執筆のイメージもあるのである。³¹⁾ ということは、競売で“the inspection of the discriminating public”（目の肥えた大衆の吟味：p.201）にかけられ酷評され、ついに「買手」（p.203）がつかなかったジャケットは実は小説のことであるとも考えられるわけだ。持主の *White-Jacket*（作家）は、これではジャケット（小

説)を「深海の底に沈める以外に厄介払いする方法はない」(p.203)と嘆き、事実、最後にはそうするのである。ことによると、金のための仕事をせざるをえなかった当時の Melville は、本当に書きたいことには(ちょうどあの航海日誌のように)一時「封印」をし、それを「深海の底に沈め」たような心境ではなかっただろうか。生きのびるために海中でジャケット(自己の最も個性的な部分)を切り落したのはある意味では Melville 自身でもあったわけで、出版という戦争の中で、一時、書きたいものより生活の方を優先せざるをえなかった Melville の自嘲が感じられるのである。しかし、Melville はジャケットを「永遠に封印」したのではなかった。なぜなら、次の作品として彼は本当に「失敗する」ような本を書き、ジャケットは白鯨に姿を変えて再び浮き上がる運命にあったからである。

註

- 1) Melville, *White-Jacket or The World in a Man-of-War* (The Northwestern-Newberry Edition of the 1970 年版), p. 3. 以下、この作品からの引用はすべて上の版によるものとする。また、引用文中の断りのないイタリック体の使用や〔 〕内の書き入れはすべて筆者による。
- 2) 拙稿「White-Jacket 試論 (I)」p.18 を参照されたい。
- 3) "...—a strange-looking coat, to be sure; of a Quakerish amplitude about the skirts; ... and a clumsy fullness about the wristbands; ..." (p.3)
"The principal apartments, two in number, were placed in the skirts, with a wide hospitable entrance from the inside; ..." (p.36)
- 4) "It was White-Jacket that was taken for an albatross himself, as he flew out on the giddy yard-arm!" (p.7)
- 5) "On our starboard beam, like a pile of glaciers in Switzerland, lay this Staten Land, gleaming in snow-white barrenness and solitude. Unnumbered white albatross were skimming the sea near by, and clouds of smaller white wings fell through the air like snow-flakes. High, towering in their own turbaned snows, the far inland pinnacles loomed up, like the border of some other world. Flashing walls and crystal battlements, like the diamond watch-towers along heaven's furthest frontier." (p. 116)
- 6) Ad de Vries; *Dictionary of Symbols and Imagery* (North-Holland Publishing Company, 1974), p.299 参照。
- 7) このような考え方をする批評家は多く、例えば、Howard P. Vincent, "White-Jacket: An Essay in Interpretation" (The New England Quarterly, XXII) を参照。
- 8) 拙稿「White-Jacket 試論 (I)」p.18 を参照されたい。
- 9) "I, and all my pantries and their contents, were soaked through and through, and my pocket-edition of Shakespeare was reduced to an omelet." (p.37)
- 10) "I thought to myself, this now is as it should be. It is good to shake off, now and then, this iron yoke round our necks. And after having once permitted us sailors to be a little noisy, in a harmless way—somewhat merrily turbulent—the officers cannot, with any good grace, be so excessively stern and unyielding as before. I began to think a man-of-war a man-of-peace-and-good-will, after all. But, alas! disappointment came." (p.95)
- 11) "But, alas! those skirts were lamentably scanty; and though, with its quiltings, the jacket was stuffed out about the breasts like a Christmas turkey, ... yet about the loins it was shorter than a ballet-dancer's skirts; ...
Then, again, the repeated soakings and dryings it had undergone, had by this time made it shrink woefully all over, especially in the arms, so that the wristbands had gradually crawled up near to the elbows; ..." (p.100)
- 12) "On every occasion when the venturing Redburn feels inadequate in a social situation he protectively draws his jacket about him half-defiantly, retreatingly."
Howard P. Vincent, *The Tailoring of Melville's White-Jacket* (Northwestern University Press, 1970), p.21
- 13) "...on the first Sunday of every month we had a grand 'muster round the capstan,' when we passed in solemn review before the captain and officers, who closely scanned our frocks and

- trowsers, to see whether they were according to the Navy cut.”
(p.292: この部分のイタリック体の使用は Melville による.)
- 14) “In contrast with the funeral hue of these surroundings, the prone sailor’s exterior apparel, *white jumper and white duck trousers, each more or less soiled*, dimly glimmered in the obscure light of the bay *like a patch of discolored snow* in early April lingering at some upland cave’s black mouth.”
Melville, *Billy Budd, Sailor* (The University of Chicago Press, 1962), pp.118-119.
- 15) 呉茂一, 「ギリシア神話・下巻」(新潮文庫, 1969, 新潮社, 1979), p.115, 144.
ブルフィンチ, 「ギリシア・ローマ神話」, 野上弥生子訳(岩波文庫, 1953, 岩波書店, 1978), pp.201-202 参照.
- 16) 軍艦世界を陽気に渡ってゆく船員 Landless によれば, この恭順の動作は世渡りの秘訣である: “Now take my advice, and steer clear of all trouble. D’y e see, *touch your tile* whenever a swob (officer) speaks to you.” (p.384) Chase でさえ艦長に嘆願の時は「帽子のひさしを口にあて, 首はうなだれたまま」(p.214) の姿勢をとっている.
- 17) 拙稿「*White-Jacket* 試論 (I)」p.14 を参照されたい.
- 18) *Moby-Dick* の第一章“Loomings”の最後を参照されたい. “...and, midmost of them all, one grand hooded phantom, like a snow hill in the air.” (Melville, *Moby-Dick or, The Whale*, p.6: Hendricks House Edition の 1962 年版による.)
- 19) なお, 鞭刑には最後の審判のイメージが重ねられていること(下記の引用を参照されたい)を考えあわせると, 艦長は造物主である神であり, *White-Jacket* の行為は造物主に対する反逆の要素もはらんでいるとも考えられよう.
“Indeed, to such a man the naval summons to witness punishment carries a thrill, somewhat akin to what we may impute to the quick and the dead, when they shall hear the Last Trump, that is to bid them all arise in their ranks, and behold the final penalties inflicted upon the sinners of our race.” (p.135)
- 20) “...while I, who, in the desperation of my soul, had but just escaped being a murderer and a suicide, almost burst into tears of thanksgiving where I stood.” (p.281)
- 21) “Again it should be emphasized that what he is saved from is the fate of Melville’s characteristic hero.” Alan Lebowitz, *Progress into Silence: A Study of Melville’s Heroes* (Indiana University Press, 1970), p.126 参照.
- 22) “Though I did my best to carry off my vexation with an air of indifference, need I say how I cursed my jacket, that *it thus seemed the means of fastening on me the murder of one of my shipmates, and the probable murder of two more.*” (p.333)
“But Priming knew better; nothing could move him; and he ever afterward eyed me as virtuous citizens do *some notorious underhand villain* going unhung of justice.
Jacket! jacket! thou hast much to answer for, jacket!” (p.334)
- 23) “Have a care, then, have a care, lest you come to a sad end, even *the end of a rope*; lest, with a black-and-blue throat, you turn *a dumb diver after pearl-shells*; put to bed forever, and tucked in, in your own hammock, at the bottem of the sea. And there you will lie, White-Jacket, while hostile navies are playing cannon-ball billiards over your grave.” (p.294)
引用文中の“the end of a rope”は Ahab の最後を, “a dumb diver after pearl-shells”は Taji を (pearl は Yillah を連想させるので) それぞれ思わせる言葉である.
- 24) “A few days after, a large nail was driven straight through the two covers, and clinched on the other side, and, thus everlastingly sealed, the book was committed to the deep.” (p.43)
- 25) 軍艦に人を閉じこめる「牢獄」のイメージがあることについては前の論文において述べた. 「*White-Jacket* 試論 (I)」, p.15 を参照されたい.
- 26) “‘Ah! sir,’ sighed Jack, ‘why do the thirsty camels of the desert desire to lap the waters of the fountain and *roll in the green grass of the oasis*? Are we not but just from the ocean Sahara? and is not this Rio *a verdant spot*, noble Captain? Surely you will not keep us always tethered at anchor, when a little more cable would admit of our cropping the herbage! And it is a weary thing, Captain Claret, to be imprisoned month after month on the gun-deck,

without so much as *smelling a citron*. Ah ! ” (p. 214)

- 27) 研究社「新英和大辞典」(第五版, 1980) による。
また, *Webster's Third New International Dictionary* では, “Pisgah sight”は“a distant view (as of an unobtainable objective)”と説明されている。
- 28) Melville, *Redburn His First Voyage* (The Northwestern-Newberry Edition の 1969 年版), p.133.
以下, この作品からの引用はすべて上の版によるものとする。
- 29) 拙稿「*Redburn* と失なわれた永遠の世界」(学習院女子短期大学紀要 XV 1977), p.46 を参照されたい。
- 30) “They [*Redburn* and *White-Jacket*] are two jobs, which I have done for money—being forced to it, as other men are to sawing wood....So far as I am individually concerned, & independent of my pocket, it is my earnest desire to write those sort of books which are said to ‘fail.’—pardon this egotism.” Melville より岳父 Lemuel Shaw にあてた 1849 年 10 月 6 日の手紙。Jay Leyda, *The Melville Log* (1951; rpt. New York: Gordian Press, 1969), vol. I. p.316 に収録。なお, この部分のイタリック体の使用は Melville 自身による。
- 31) Vincent, pp.18-20.

尚, *White-Jacket* よりの引用文の訳については, 前稿と同様, 坂下昇氏(メルヴィル全集第 6 巻, 国書刊行会)を一部参考にさせて頂いた。